

# ブツダチャリタ第15章「初転法輪」

——梵文テキストと和訳——

松 田 和 信

## まえがき

アシュヴァゴーシャ（馬鳴、2世紀）がカーヴィヤ調の韻文でブツダの生涯を綴った『ブツダチャリタ（*Buddhacarita*）』については、E. B. カウエルや E. H. ジョンストンの校訂本に用いられた梵文写本が第14章「現等覚章」の第31偈以降が欠落した不完全な写本であったため<sup>1)</sup>、それ以降の梵文原典は失われて、もはや存在しないものと思われてきた。ところが、筆者が独ミュンヘン大学のイエンス＝ウヴェ・ハルトマン（Jens-Uwe Hartmann）教授と解読を進めているアシュヴァゴーシャに帰せられる梵文『三啓集（*Tridaṇḍamālā*）』には、『ブツダチャリタ』の失われた偈が多く含まれている。『三啓集』は40種の阿含經典のそれぞれを、主としてアシュヴァゴーシャの偈で挟み込んだ読誦經典集であるが<sup>2)</sup>、その中の第34三啓経はブツダの初転法輪を説く『転法輪経』であり<sup>3)</sup>、經典の前には『ブツダチャリタ』第15章「転法輪章」の全58偈がそのまま配されている。本稿の目的は、この写本から回収される『ブツダチャリタ』第15章の梵文テキストと和訳を提供することにある。『ブツダチャリタ』

- 
- 1) E. B. Cowell, *The Buddha-Karita or Live of Buddha by Asvaghosa*, Oxford, 1893, Rep., Amsterdam, 1970, E. H. Johnston, *The Buddhacarita: Or, Acts of the Buddha, Part I - Sanskrit Text* (Panjab University Oriental Publications, No. 31), Calcutta, 1935. 『ブツダチャリタ』の書誌については、岡野潔教授（九州大学）の解題に詳しい (<http://gdgdgd.g.dgdg.jp/buddhacarita.html>)。2) 『三啓集』写本とその内容等については、筆者はすでに最初の論攷を発表しているので、そちらを参照していただきたい。ここでは再説しない。拙稿「三啓集（*Tridaṇḍamālā*）における勝義空経とブツダチャリタ」『印度学仏教学研究』第68巻1号（2019年12月）1-11頁。3) 『雑阿含』第379経。単独訳は義浄訳『三転法輪経』（大正110番）。

第15章は、神秘主義によってではなく、苦の原因追及という論理主義に立って輪廻の夢から覚めてブッダ（目覚めた者、覚った者）となったシッダータが、彼を見捨ててヴァーラーナシーの鹿野園に去った5人の苦行仲間（五比丘）に対して、初めて自分の教え（法 dharma）を秘儀によらずに一般公開して説くという<sup>4)</sup>、いわば仏教という反インド思想誕生の核心を叙述する章である。

## 梵文テキストと和訳

『三啓集』の梵文貝葉写本は、アティシャ（10-11世紀）によってインドからもたらされ、長くチベットのポカン寺（sPos khang）に伝えられていたが、写本自体はすでに失われた可能性が高く、G. ツッチが1939年にポカン寺で撮影した写真と、ツッチのネガから焼かれたラーフラ・サーンクリトヤーヤナ・コレクションの写真しか見ることができない<sup>5)</sup>。ただ、両者は同一写真ではあるが、引き伸ばし機のフォーカスの違いからか、写真自体の状態は異なる。いずれも全体の三分の一ほどはフォーカスが外れ、所謂ピンボケ写真となっている。ここで取り上げた箇所（folios 92v1-95r1）も状態は良くない。不思議なことに、写真の全体が均一でなく、写真によって右半分あるいは左半分のフォーカスが激しく外れているのである。ただでさえ、元がアシュヴァゴーシャの技巧を凝らした美しくも難しい詩作品であることに加えて、さらにこのような写真の状態から、筆者にとって解読は困難を極めた。テキストには2種の括弧を用いたが、鉤括弧は、ピンボケで不鮮明ではあるが、ほぼ確実にそのように読める箇所、丸括弧は写真からはほとんど読めずに、チベット語訳と漢訳<sup>6)</sup>、あるいは

4) 漢訳では「法」と訳される dharma (Pāli, dhamma) という語は、現代の訳者によってしばしば「真理」と訳されるが、筆者はこの語を真理と訳すことに強い抵抗感を覚える。仏教が何らかの不滅の真理などといったものを説いていると筆者は考えたことがない。「〔ブッダの〕教え」つまり「〔ブッダの正しい〕思想」の意味で理解しても何ら問題ないであろう。「ダルマ（ダンマ）を見る」などと言うが、「縁起（すべてのものには原因がある）」というブッダの思想を知る」という理解で十分ではないか。

5) 写本の書誌情報については前掲拙稿を参照していただきたい。

6) チベット語訳についてはウェーラーの校訂本、F. Weller, *Das Leben des Buddha von Āśvaghōṣa, Tibetisch und Deutsch*, II, Leipzig (1928) pp. 252-265, および、ハルトマン教授から提供された Roland Steiner の校訂本（未出版）を、漢訳については大正蔵192番、および石上善應『佛所行讃』仏典講座5（大蔵出版1993）を参照した。

文章、単語の前後関係等からの想定であることを示している。なお、第37偈と42偈の一部は現時点では想定もできず、長短の韻律記号を入れるにとどめた。ただ、チベット語訳を見れば内容は明確であるので、和訳ではチベット語訳から補った。

韻律については、第1偈から第51偈は Upajāti (11 × 4)、第52偈から最終第58偈は Praharṣinī (13 × 4) である。偈番号は写本には書かれていない。筆者が入れたものである。また、梵文写本に一般的に見られる書写生の書き癖や些細な誤写はすべて断りなく正規形に戻した。代用アヌスヴァーラもすべて修正した。以下にテキストと和訳を提示するが、それに先だって、15章「転法輪章」を項目分けして偈番号を示しておきたい。

- 1) ウパガとの対話 1-13
- 2) 鹿野園に入る 14-15
- 3) 五比丘の対応 16-20
- 4) 五比丘を諭す 21-23
- 5) 五比丘の反論 24-25
- 6) 中道・八聖道 26-37
- 7) 四諦を説く
  - 7.0 総論 38
  - 7.1 苦諦 39-41
  - 7.2 集諦 42-43
  - 7.3 滅諦 44-45
  - 7.4 道諦 46
- 8) 四諦の知断証修 47-51
- 9) カウンディンヤ 52-53
- 10) 神々による讃歎 54-58

taṃ śāntaṃ ojasvinam āptakāryaṃ prayāntaṃ ekaṃ bahuneva sārđham |

ka(92v2)ścin niśāmyādhvani bhikṣudharmā savismayaḥ prāñjalir ity uvāca || 1 ||

なすべきことをなし終わり、寂靜にして、光り輝き、多くの人々とともに〔進むか〕のように一人で進んでゆく彼（シッダールタ）に、路上で、比丘の性質

を持つ (bhikṣudharman) ある者が気づいて、怪訝そうに、合掌してこう言った。

sattveṣu sakteṣu yathāsy asaktaḥ calendriyāśveṣu jitendriyāśvaḥ |

śāṅke namasyo 'si śāśāṅkakalpa prajñārasasyātirasasya tr̥ptaḥ || 2 ||

「人々は執着するのに、あなたは執着がなく、〔人々には〕動き回る感官の馬があるのに、〔あなたは〕感官の馬に打ち勝っているかのようだ。満月のような方よ、私が思うに、極めて美味なる知性の味に満足したあなたは尊敬に値するようだ。

vaktrasya te dhīra yathā prasādaḥ karoṣi caśvāyam ihendriyāṇām |

nūnaṃ kṛtārtho 'si maharṣabhākṣa<sup>7)</sup> kas te gurur brūhi yato 'si siddha(92v3)ḥ || 3 ||

勇者よ、あなたの顔は清らかで、この世であなたは感官を自在に制御しているかのようだ。偉大な牡牛の目をした方よ、今やあなたは目的をなし遂げたのですね。あなたが師事して成就を得た、そのあなたの師が誰か言って下さい。」

taṃ so 'bravīn nāsti mamānuśāstā māno na me kaścana nāvamānyaḥ |

svayaṃbhuvam mām avagaccha dharme nirvāṇam āpannam atulyam anyaiḥ || 4 ||

彼（シッダールタ）はこの者に言った。「私には、就いた師はいない。私には、いかなる尊敬すべき人も、卑しむべき人もいない。私を、涅槃を得て、他の者たちとは違う者、教え（dharma）の上に独立自存する者だと知りなさい。

yataś ca boddhavyam abuddham anyair buddham mayā kṛtsnam ato 'smi buddhaḥ |

kleśāś ca yasmād abhinirjitā me tasmā jinaṃ mām upagāvagaccha || 5 ||

他の者たちが覚っていない覚るべきもののすべてを私は覚った。だから私はブッダである。私は煩惱を討ち滅ぼした。だから、ウパガ（近づきし者）よ<sup>8)</sup>、

7) Ms. maharṣibhākṣa.

8) パーリ語聖典では Upaka, Saṅghabhedavastu では Upagu と綴られるが (Gnoli ed., I, p. 131)、ここでは Upaga である。ブッダの伝記や経典、律典に登場する人物名は、その人物の生涯を分かった上で、その生涯を象徴するに相応しい語が与えられている場合が圧倒的に多い。シッダールタの名も例外ではないと思う。つまり後代の命名ということになるが、ここでも、この人物はヴァーラーナシーに向かう路上でブッダに寄って来て声をかけた人物であ

私を勝利者 (jina) であると知りなさい。

vārāṇasīm [eṣa ca] saumya yāmi tatrāhaniṣye 'mṛ(92v4)tadharmabherīm |

ārtasya duḥkhair jagato hitāya na mānāhetor na yaśaḥsukhāya || 6 ||

友よ、この〔私は〕ヴァーラーナシーへ行くところである。そこで私は不死の法鼓を打ち鳴らすであろう。苦しみに苛まされた世間の人々を利益するためであって、慢心のためでもなく、〔自分の〕名誉や安楽のためでもない。

tīrṇo jagattārayitā bhaveyaṃ sattvāni muktaḥ parimocayeyam |

ity ārtam ālokya hi jīvalokaṃ mamābhavat pūrvam iyaṃ pratijñā || 7 ||

『〔私が彼岸に〕渡ったら、世間の人々を渡らせよう。〔私が〕解脱したら、人々を解脱させよう。』と、悩む生者の世間 (jīvaloka) を見て、過去において、私にはこの誓いがあったのだ。

kiṃ citram ātmānam ihaikam eva yad vārayed artham [avāpya] kaścit |

mahājanam yas tv animīlitākṣaṃ viśeṣam āsā(92v5)dya vibharti so 'rthyah || 8 ||

ある人が、この世でひとつの財を得て、自ら守り抜くならば、何と驚嘆すべきことであろう。しかし、特別に〔財を〕得て、目を見開いて〔待っている〕多くの人たちに分配するなら、その人〔こそ、真の〕財産家 (arthya) である。

yo hi sthalastho naram uhyamānam noddhartum icchen na sa sādthurūpaḥ |

labdhvā nidhiṃ yaś ca (janam)<sup>9)</sup> daridraṃ nārthena yuñjyād avicakṣaṇaḥ saḥ || 9 ||

陸にいる人が〔水に〕流されてゆく人を引き上げようと欲しないなら、その人は善人 (sādthurūpa) ではない。財宝を得ても、貧しい人々に財を分け与えないなら、その人は賢者ではない。

svasthena rogābhīhato hi yuktaṃ cikitsitum hastagatauśadhena |

り、それを象徴する名前が与えられているように思われる。逆に、意味不明の人物名は案外本当の名前かもしれない。

9) この2文字は筆者には読めない。写真は明瞭であるが、読解不能の文字が書かれている。チベット語 skye bo から janam を想定した。

nistīrṇamārgeṇa tatho[papannam ājñā]tum unmārgagatāya mārgaḥ || 10 ||

薬草を手を持つ健康な人が、病気に冒された人を治療することは理にかなっている。同様に、すでに道を渡り終わった人が、誤った道にいる人に〔正しい〕道を教えることは理にかなっている。

tathā hi dīpaḥ kurute pra(93r1)kāśaṃ na caiva taddhetukam eti rāgam |

buddhas tathā jñānamayaṃ prakāśaṃ karoti tasmāc ca na rāgam eti || 11 ||

実に、灯火が〔赤い〕輝きを作っても、〔照らされたものが〕それを原因とする赤色 (rāga) に染まることはない。同様に、ブッダが知性でできた輝きを作っても、〔人々が〕その〔輝き〕から貪欲 (rāga) に染まることはない。

dhruvaṃ hi kāṣṭhe<sup>10)</sup> yathā hutāśanaḥ samīraṇaḥ khe salilaṃ pṛthivyām |

tadvan munīnām niyato 'vabodho gayeṣu vai kāśiṣu dharmavādaḥ || 12 ||

例えば、木片中に火が、空中に風が、地中に水があることが確実であるように、同様に、牟尼たちはガヤーにおいてさとりを開き、カーシーにおいて教え (dharma) を説くことが決まっているのである。」

aho hi nāmetry upago 'bhi[vādyā yatheccham u](tsrjya) [tato jagāma] |

muhur muhur vismaya(93r2)phulladṛṣṭir jātasprho buddham avekṣyamāṇaḥ || 13 ||

〔すると〕「ああ、そうですか。」とウパガは言って、怪訝そうに目を開き、思いにかられて、何度も何度もブッダを振り返りつつ、趣くままそこから離れて去って行った。

tato muniḥ kāśipurīm krameṇa vasvokasārapratimām dadarśa |

sakhīm ivāliṅgya samāgatām tām<sup>11)</sup> bhāgīrathīm caiva vārāṇasīm ca || 14 ||

それから牟尼 (ブッダ) は、だんだんと、あたかもバーギーラティー〔河〕とヴァーラーナシー〔河〕が恋人を抱きしめるように合流するところの、〔クベーラ神の都〕ヴァスヴォーカサーラのような、かのカーシーの町を見た。

10) Ms. kāṣṭhe tu.

11) 上欄外に tām\* が追記されている。



sa kokilonnāditavṛkṣaṣaṇḍaṃ maharṣijuṣṭaṃ mṛgadāvaṃ eva |

jvalan prabhāve[na ca tejasā] ca vai [kāśan ā]ditya iva prapade || 15 ||

彼は威厳と威光によって燃え立ちつつ、太陽が輝きつつ〔入る〕ように、コーキラ鳥の鳴く森があり、大仙たちに好まれた鹿野園（mṛgadāva）に入った。

kaunḍinya[gotro] (93r3) 'tha mahāhvayaś ca bāṣpāśvajidbhadrajitā<sup>12)</sup> tathaiva |

taṃ bhikṣavaḥ pañca nirīkṣya<sup>13)</sup> dūrāt parasparaṃ vākyam idaṃ jajalpuḥ || 16 ||

カウンディンヤ姓の者、マハーフヴァヤ<sup>14)</sup>、バーシュパ、アシュヴァジット、バドラジットの五人の比丘は、遠くから彼（ブツダ）を見て、互いにこのような言葉を語った。

sukhātmako gautama eṣa bhikṣur abhyeti tasmāt tapaso nivṛttaḥ |

naivābhigamyah khalu nābhivādyo bhagnapratijño hi na mānanārhaḥ || 17 ||

「かの苦行（tapas）から退いて、安楽に耽るあのゴータマ家の（gautama）比丘がやって来る<sup>15)</sup>。〔彼に〕決して近づくべきではなく、話しかけるべきではない。〔苦行の〕誓いを破った者は尊敬に値しないのだ。

sa[ced bhaved āsisīṣuḥ kadāci]t prajñāpyatām āsanam etad asmai |

(93r4) yasmai hi kasmaicid upāgatāya nātithyam arhanti na kartum āryāḥ || 18 ||

しかし〔彼が〕座りたいと願うなら、いつでも彼のためにこの座を用意してやろう。なぜなら、やって来た者が誰であれ、聖なる〔我々〕が〔その人を〕歓待しないことは相応しくないのだ。」

12) Ms. vāspo 'śvajidbhadrajitā.

13) Ms. nirīkṣa.

14) 名前の意味は同じであるが、*Saundarananda*, XVI, 89 でも、マハーナーマン（Mahānāman）の代わりにマハーフヴァヤ（Mahā-āhvaya）という綴りが現れる。

15) 現代の訳者は梵語の Gautama を「ガウタマ」と片仮名で写すが、この語が gotama の二次派生語であるなら、苗字はあくまで Gotama であり、Gautama は「ゴータマ家の」という形容詞であろう。パーリ語には母音 au がないから Gotama となるだけであって、パーリ語の Gotama も梵語と同じように「ゴータマ家の人、ゴータマ家の男」と訳す方が正確ではないか。だから呼格も「ガウタマよ、ゴータマよ」ではなくて、「ゴータマ家の人よ、ゴータマ家の男よ」である。Gautamī, Gotamī は「ゴータマ家の女」である。ただ、筆者の知る用例はごく限られたものに過ぎないから、単なる筆者の思い間違いかもしれない。

kṛtvā kriyākāram athopaviṣṭās te bhikṣavaś copayayau ca buddhaḥ |

yathā yathā copasasarpa tāms tu tathā tathā te bibhiduḥ pratijñām || 19 ||

さて、約束を交わして、彼ら比丘たちは座っていたが、ブッダがやって来て、彼らに近づけば近づくほど、彼ら〔比丘たち〕は誓いを破っていった。

kaścit tu jagrāha tato 'sya vāsaḥ pātram tathānyaḥ praṇipatya dadhre |

kaści[d babhājāsanam arghyam a]smai pādyam tathānyā(93r5)v upaninyatuś ca || 20 ||

そこで、ある者は彼の衣を受け取り、別の者は礼拝して〔彼の〕鉢を持ち、ある者は彼のために相応しい座を分かち、他の二人は洗足の水を差し出した。

evaṃ prakārāṃ bahumānayuktām sarvām pracakrur guruvṛttim asmai |

gotrābhidhānam tu na tatyajus te tāt sānukampo bhagavān uvāca || 21 ||

このように、彼（ブッダ）のために、尊敬〔を表すに〕相応しいことがら<sup>16)</sup>、師を〔敬う〕あらゆる振る舞いを行ったが、彼らは〔ブッダを〕姓で呼ぶことをやめなかった。〔そこで〕憐れみを抱いて世尊は彼らに言った。

mā bhikṣavo vocata pūrvavṛtṭyā<sup>17)</sup> mātārham arhantam agauraveṇa |

mānāpamānau khalu me samānau yuṣmāṃs tv apuṇyād vinivartayāmi || 22 ||

「比丘たちよ、尊敬に値する阿羅漢に対して、敬意を払わずに、以前の習慣によって語りかけてはいけません。私には尊敬と非難は同じことであるが、おまえたちを私が不徳から引き戻してあげよう。

evaṃ hi lokasya hitāya buddhaṃ (93v1) sarveṣu bhūteṣu samapravṛttam |

nāmnā vaded yas sa gurūpamardād ucchedadharmā pitarīva duṣṭaḥ || 23 ||

このように、世間の人々の利益のため、すべての生きとし生けるものに等しく振る舞うブッダに対して、名前によって語りかけるのであれば、その者は、師を侮辱すること〔になる〕から、破滅の性質（断法）を持つ者（ucchedadharman）

16) 語形上は prakāra が guruvṛtti にかかる形容詞として使われているように見えるが、疑問が残る。暫定的に同格の名詞のように訳したが、a 句を evaṃ prakārāṃ bahumānayuktān と修正して翻訳すべきかもしれない。

17) Ms. pūrvavṛtṭyā.



として、父親を〔害する者の〕如くに、害される者〔となるの〕である。」

ity evam uktā vadatām vareṇa maharṣiṇā te karuṇātmakena |

pratyūcur īṣatsmayamānavaktrā mohād asaṃbhāvanayā ca bhraṣṭāḥ || 24 ||

このように、説者中の最上者にして慈しみを本質とする大仙（ブッダ）によって語りかけられた彼ら〔五比丘〕は、愚かさゆえ、不敬の念から〔心が〕落ち込んで、少し照れ笑いを浮かべた顔をして答えた。

nābudhyathā gautama tena tāvat tapaḥprakarṣeṇa pareṇa tattvam |

sukhe sthito duṣkarasādhyaṃ arthaṃ tvaṃ nāma pa(93v2)śyer iti ko 'tra hetuḥ || 25 ||

「ゴータマ家の方よ、とにかく、あなたは究極の苦行の卓越さ（tapaḥprakarṣa）によって真実を覚らなかった。安楽にとどまるあなたが、難行によって達成されべき目的を確かに見たというなら、その理由は何ですか。」

evam yadā naiva tathāgatasya te bhikṣavaḥ śraddadhur arthatattvam |

bodheś ca mārgaṃ vividus tato 'nyaṃ mārgaṃ tato mārgavid ity uvāca || 26 ||

このように、彼ら比丘たちは、如来の〔見た〕目的の真実（arthatattva）を信じず、さとり道の道はそれとは異なると思っていたので、そこで道を知る人（ブッダ）は次のように道を説いた。

ātmaklamaṃ bālajānābhipannaṃ saṅgaṃ tathā cendriyagocareṣu |

etāv ubhau paśyata doṣavantau pakṣāv amārgāv amṛtāgamasya || 27 ||

「愚か者たちが耽っている、自分を疲労させることと、感官の対象に執着することとの、その両翼を、過失あるもの、不死に至る道ではないと見なさい。

śārīrakhedai[r hi tapo'bhi](dhā)naiḥ paryākule (93v3) cetasi bādhyamāne |

na jātu vinded api lokasaṃjñāṃ atīndriyaṃ kiṃ bata tattvamārgaṃ || 28 ||

苦行と称される身体の疲労によって、乱された心が傷つけられる時、人は決して世間的な理解すら知ることはないであろう。ましてや感官を超えた真実の道〔を知ること〕においてをや。

yathā hi dīpena na vārisekair naiśaṃ tamo nāśaṃ ihābhyupaiti |

jñānāgninājñānatamas tathaiva praṇāśam abhyeti na kāyakhedaḥ || 29 ||

例えば、ここで、灯火によって夜の闇は滅に至るが、水を撒くことによっては〔滅に至ら〕ないように、同様に、知性の火によって無知の闇は消滅に至るが、身体の疲労によっては〔消滅に至ら〕ない。

kāṣṭhaṃ vibhindaṃś ca vipātayaṃś ca naivāgnim āpnoti [yathāgnikāmaḥ] |

tad eva [mathnan labhate] (’bhyupāyād) [yo](93v4)gāt tathāpnoty amṛtaṃ na khedāt || 30 ||

例えば、火を求める人が、木片を切り刻み、引き裂いても火を得ないが、その同じ〔木片〕を正しい方法 (abhyupāya) で摩擦すれば〔火を〕得るように、同様に、人は〔正しい〕ヨーガから不死を得るのであって、〔身体の〕疲労からではない。

kāmeṣv anartheṣu na cāpi sakto rajastamobhyām abhibhūtacetāḥ |

śakto ’rthanītāv api siddhim āptuṃ prāg eva vairāgyavidhau viruddhe || 31 ||

また、塵 (rajas) と闇 (tamas) に心が打ち負かされて<sup>18)</sup>、利なき愛欲の対象に執着する者は、〔世間における〕利の処世術 (arthanīti) においても成就を得ることはできぬ。ましてや〔世間とは〕真逆の離貪の手順 (vairāgyavidhi) においてをや<sup>19)</sup>。

yathā hi rogābhihatasya jantor naivāsty apathyānnabhujaś cikitsā |

ajñānarogābhihatasya tadvat kāmeṣu saktasya kutaḥ praśāntiḥ || 32 ||

例えば、病に冒されて、間違った食物を食べる人に、決して快復がないように、同様に、無知の病に冒され、愛欲の対象に執着する者に、どうして寂靜があるうか。

[yathā] (ca vahnē)[h pa](93v5)vaneritasya śuṣkāśayasthasya na śāntir asti |

18) 佛教大学大学院の田中裕成氏の教示によると、アシュヴァゴーシャの作品では、塵 (rajas) は無明以外の煩悩を、闇 (tamas) は無明を意味し、アシュヴァゴーシャを分析する場合のメルクマールのひとつになるという。

19) 第38偈にも現れるが vidhi の語を日本語にどう置き換えるかは難しい。方法、方式、手順、軌範といった意味であろうが、ここでは仮に「手順」と訳しておく。ただこの訳語では違和感が残る。なお、vidhi は他のアシュヴァゴーシャ作品でもよく用いられる語である。

cittasya rāgānugatasya tadvat kāmāśayasthasya na śāntir asti || 33 ||

例えば、乾いた地にとどまって、風にあおられた火に静まりがないように、同様に、貪欲につき従われ、愛欲の対象という地にある心に静まりはない。

antāv imau tena vivarjayitvā madhyena mārgo 'dhigato<sup>20)</sup> mayānyaḥ |

atyantaduḥkhopaśamasya netā kṣemaḥ śivaś caiva nirāmayaś ca || 34 ||

私はこの両極端を放棄して、その真ん中としての別な道、すなわち、究極的に苦しみを鎮める導き手（netṛ）であり、安穩であり、幸福で、息災なる〔道〕を証得したのだ。

saṃdarśa[nāditya](ruci)prakāśo<sup>21)</sup> viśuddhasaṃkalpa[rathopanīta]ḥ |

[samyaksamāvādi](94r1)tavāgvihāraḥ śubhakriyārāmasabhābhīrāmaḥ || 35 ||

〔その道は〕(1) 正しい見解という太陽光線で輝き、(2) 清らかな思惟の車に引かれ、(3) 正しく語られた言葉を精舎とし、(4) 善い行いによる遊園小屋の楽しみを持ち<sup>22)</sup>、

agarhitājīvamahāsubhikṣaḥ samyakprayogaprabalānuyātraḥ |

sarvatra samyaksmṛtiguptiguptaḥ samādhiśayyāsanavāsabhūmiḥ || 36 ||

(5) 非難されない生活による大豊作を持ち、(6) 正しい行動による力と従者を持ち、(7) どこでも正しい念の砦に守られ、(8) 三昧という床と座を居住地としているのである。

ity uttamo 'ṣṭāṅga ihaiṣa panthā nirvāhako mṛtyujarāmayebhyaḥ |

saṃ - - - kṛtasarvakāryo nāmutra caiveha punaḥ [prayāti] || 37 ||

このように、ここにおいて、八支よりなるこの最高の道は、〔人を〕死と老いと病から運び出すものであり、それから運び出されて<sup>23)</sup>、すべてのなすべきこ

20) Ms. 'dhihito.

21) Ms. sandarśa-.

22) チベット語訳（dge ba'i bya ba'i skyed tshal brgya phrag mñon par dga'）からすると、チベット語訳者の見た写本には śubhakriyārāmaśatābhīrāma（善い行いによる百の遊園の楽しみを持ち）と書かれていたと思われる。

とをなし終わった人は、再びこの世やあの世を巡ることはない。

[kṛtsnam i](94r2)daṃ duḥkham idaṃ nimittam ayaṃ nirodho 'sya ca mārga eva |  
ity aśrute dharmavidhāv apūrvam cakṣur vimokṣāya mamodapādi || 38 ||

『この一切は苦である。これが〔苦の〕因である。これが〔苦の因の〕滅である。〔これが〕これ〔苦の因の滅〕に〔至る〕道である。』という、いまだ聞かれたことのない教え（dharma）の手順について<sup>24)</sup>、解脱のための、前代未聞の眼が私に生まれたのである。

jātir jarā vyādhir atho vipattiḥ priyātyayo vipriyasamprayogaḥ |  
aprāptir arthasya ca kāmṅkṣitasya nānāvidhaṃ duḥkham idaṃ paraiti || 39 ||

生れること、老いること、病い、さらに、死ぬこと、愛する人と別れること、憎い人と会うこと、欲しいものを得ないこと、この〔ような〕様々な種類の苦しみに人は遭遇する。

kāmātmano vā(pi jit)ātmano vā śarīriṇo vā(py a)śarīriṇo (94r3) vā |  
yā nirguṇā ca kvacana pravṛttiḥ [samāsa]tas tat samavaita duḥkham || 40 ||

愛欲を自己とする者にとっても、自己に打ち勝った者にとっても、身体を持つ者にとっても、身体を持たない者にとっても、どこにおいても、徳性を欠いて流転することが、要するに苦しみであると理解しなさい<sup>25)</sup>。

śāntārccir alpo 'pi yathā hi vahnir naivoṣṇabhāvaṃ sahajaṃ jahāti |  
śāntāpi sūkṣmāpi tathātmasaṃjñā duḥkhātmikety eva suniścitaṃ me || 41 ||

例えば、炎が静まったわずかな火でも、生来の熱性を決して捨てないように、同様に、静まってわずかになっても、アートマン〔があるという〕想い（ātmasaṃjñā）は苦しみを本質とする、ということは私には確定的なことである。

23) チベット語訳 (gañ las drañs nas) から補う。

24) 注19参照。

25) 第39偈で八苦のうちの第7項「求不得苦」までが示されるのであるから、この第40偈は偈全体で第8項「五陰盛苦」を説いていると思われる。

doṣāṃs tu rāgaprabhṛtīn vicitrān karmāṇi doṣaprabhavāni caiva |

duḥkhasya hetuṃ niyataṃ ~ ~ ×, ~ ~ ~ ~ (94r4)mbu yathāṅkurasya || 42 ||

貪欲などの種々の過失と、過失を生み出す諸々の業（karman）とが、苦の因であると決定していると知りなさい。例えば、地と種子と時と水が芽の〔因である〕ように<sup>26)</sup>。

bhavaprabandhe divi vāpy adho vā rāgādayo doṣagaṇā hi hetuḥ |

nikṣṭamadyottamacitratāyāḥ karmāṇi citrāny<sup>27)</sup> api tatra tatra || 43 ||

天界でも下界でも、生存の連続（bhavaprabandha）については、貪欲などの過失の群れが因である。それぞれにおいて、下中上の種々〔に分けられる生存の連続〕の〔因は〕種々の業である。

doṣakṣayān nāsti bhavaprabandhaḥ karmakṣayaś cen na ca duḥkham asti |

sato hi yasmāt samudeti yo 'rtho nodeti tasmād asataḥ sa [bhūyah] || 44 ||

過失が尽きたら、生存の連続はない。またもし業が尽きたら、苦はない。A ということから（artha）は B があるから生じるが、B がなければ A はもはや生じることはない。

[yasmin na jātir na jarā na mṛtyu](94r5)r nāgnir na bhūr nāmbu na kham na vāyuh |

anādimadyāntam ahāryam āryaṃ tam akṣaram citta śivaṃ nirodham || 45 ||

そこには生れることもなく、老いることもなく、死ぬこともなく、火もなく、地もなく、水もなく、空もなく、風もない、そこを、始めも中間も終わりもなく、奪われることもなく、聖なる、不壊にして、吉祥なる滅であると知りなさい<sup>28)</sup>。

26) チベット語訳 (ji ltar sa chu sa bon dus rnams myu gu'i bzhin) から補って訳したが、写本上は、読めない箇所が (a)mbu（水）で終わっているため、語順はチベット語訳とは異なる。

27) citrāny の ci の字は欄外に追記されている。チベット語訳 (rtsa ba) からすると、チベット語訳者の見た写本には mūlāny と書かれてようである。

28) 滅（涅槃）を何らかの空間的なものに理解しようとする記述は、筆者がかつて発表した梵文『ウダーナヴァルガ (Udānavarga)』のギルギット写本断簡（元は『ウダーナ』のフリーズ）にも見られる。拙稿「ウダーナヴァルガのギルギット写本」『佛教大学仏教学部論集』95号（2011）17-32頁参照。

aṣṭāṅgiko yo vihitah sa mārgaḥ so 'syābhyupāyo 'dhigamāya nānyaḥ |

adarśanād asya pathasya<sup>29)</sup> lokās tathaiva bhrātraiva paribhramanti || 46 ||

八支よりなると言われるもの、それが道であり、それがそれ（滅）を証得するための正しい方法（abhyupāya）であり、それ以外〔の正しい方法〕はない。その道を見ないから、世間の人々はまさにそのように友と彷徨い行くのである。

duḥkhaṃ pariññeyam idaṃ praheyo hetur nirodha[s tv api] sāṅkīkāryaḥ |

mārgas tathai(94v1) vaiṣa ca bhāvanīya iti pravṛttā mama buddhir atra || 47 ||

『この苦は遍知されるべきである。因は断ぜられるべきである。滅は現証されるべきである。同様にこの道は修習されるべきである。』という認識がここで私に生じた。

duḥkhaṃ pariññātam idaṃ prahīṇo hetus tathā sāṅkīkṛto nirodhaḥ |

mārgas tathaivāsyā ca bhāvito 'yam iti pravṛttaṃ mama cakṣur atra || 48 ||

『この苦は遍知された。因は断ぜられた。同様に、滅は現証された。同様に、これ（滅）に〔到る〕この道は修習された。』という眼がここで私に生じた。

yāvac ca nādrākṣam imāni tathyāṇy āryāṇi catvāri padāni samyak |

tāvan na mukto 'ham ihety avocaṃ kṛtārthatām cātmani nāpy apaśyam || 49 ||

これらの、真実で（tathya）聖なる四つの句を私が正しく見ない限り、その限り、『私は解脱した。』とは語らなかつたし、自己のうちに目的をなし遂げたとも私は見なかつたのである。

imāni sa(94v2) tyāni yadā tv abudhye buddhvā ca kartavyam akārṣam artham |

tadā vimukto 'ham ihety avocaṃ kṛtārthatām ātmani cāpy apaśyam || 50 ||

しかし、これらの真実なる（satya）〔四句〕を私が覚った時、そして、覚ってから、なすべき目的を私がなし終わった時、その時に、『私は解脱した。』と語ったし、自己のうちに目的をなし遂げたとも私は見たのである。』

---

29) Ms. yathāsyā.



ity evam asminn abhidhīyamāne maharṣiṇā kārūṇikena dharme |

avāpa cakṣuḥ śuci nīrajaskam kaunḍinyagotraḥ śataśaś ca devāḥ || 51 ||

このように、慈しみに満ちた大仙（ブツダ）によって、この教え（dharma）が説かれた時、カウンディンヤ姓の者と百の神々は塵を離れた清らかな眼を得た。

taṃ śāntaṃ niyataṃ avāptasarvakāryaṃ

sarvajño vṛṣabha ivāraṇaṃ babhāṣe |

ā(94v3)jñāsīr iti sa vaco 'bravīd mahātmā

sādhv ājñāśiṣaṃ aham uttamāṃ matim te || 52 ||

確かになすべきことをすべてなし終わって、寂静となった彼（カウンディンヤ）に対して、一切智者（ブツダ）は牡牛の如く雄叫び声を上げて言った。

「お前は覚ったのか。」と。偉大なる彼（カウンディンヤ）は言葉を発した。

「素晴らしいことに、私はあなたの最高の知性を覚りました。」

sādhv ājñāśiṣaṃ aham ity atas tu loke

kaunḍinyas tadupapadaṃ babhāra gotraṃ |

śiṣyāṇaṃ paramaguroḥ tathāgatasya

jyeṣṭhatvaṃ samadhijagāma caiva dharme || 53 ||

それ故に、「素晴らしいことに、私は覚りました。」という〔言葉〕によって、カウンディンヤはそれに相応しい〔「覚ったカウンディンヤ（Ājñāta-kaunḍinya）」という〕姓を保つことになったのである。そして〔彼は〕最高の師である如来の弟子たちの中の、および〔如来の〕教え（dharma）における最高位を得たのである。

taṃ śabdaṃ dharaṇidharā niśāmya yakṣā

nirghoṣaṃ vipulam udairayāmbabhūvuh |

sādhv etat pa(94v4)ramadrśā pravartitaṃ vai

bhūtānāṃ amṛtagamāya dharmacakram || 54 ||

その声に気づいて、大地を保持するヤクシャたちは響き渡る声を上げた。「素晴らしいことに、生きとし生けるものが不死に到るために、最高の観察者（ブ

ツダ)によって、確かにこの法輪 (dharmacakra) が転ぜられた。

śīlāraṃ<sup>30)</sup> śamadamanemi dhīviśālaṃ

hrīkīlaṃ smṛtimativairyavīryanābhi |

gāmbhīryād avitathataḥ sudeśitatvāt

trailokye sthiram avivartyam anyasāstraiḥ || 55 ||

〔この法輪は〕戒を車輻 (ara) とし、定と調伏を輪ぶち (nemi) とし、知性によって広大であり<sup>31)</sup>、恥を楔 (kīla) とし、念と慧と勇猛な精進を轂 (nābhi) としているものであり、深甚であるから、不実ではないから、善く説かれたものであるから、三界において、堅固であり、他の者たちの哲学 (śāstra) によって覆されることはない。」

yakṣebhyo dhvanim upalabhya bhūdharebhyah

khe cakrur vibudhagaṇās tam eva ghoṣam |

śrutvaivaṃ tridi(94v5)vaparaṃparābhir uccair

ābrahmaṃ bhavanam upāruroha śabdaḥ || 56 ||

大地を保持するヤクシャたちの声を認めて、空中の神々の群れもそれと同じ声を上げた。このように、声は〔神々に〕聞かれて、天界を次々と高く、ブラフマンの宮殿にまで登って行った。

śrutvā ca tridivanivāsino maharṣeṣ

trailokyam calam iti kecid ātmavantah |

citreṣu na ca viṣayeṣu rāgam īyuh

saṃvegāt tribhuvana<sup>32)</sup> eva śāntim īyuh || 57 ||

天界に住むある賢者 (神々) たちは「大仙 (ブツダ) によって三界が振動した。」と聞いて、様々な対象に対する貪欲を離れ、遠離〔の心〕から三有にお

---

30) Ms. śīlāra.

31) 法輪からの連想で、他の語がすべて車 (戦車) の部品を表していることから、viśāla は形容詞ではなく、何らかの部品を表す名詞である可能性はあるが、筆者には不明。

32) Ms. saṃvegās tribhuvana.

いて寂靜に向かった。

ity evaṃ divi bhuvi ca pravṛttamātre  
lokānāṃ parama[śivā]ya dharmacakre |  
khād vyabhrāj<sup>33)</sup> jalam apatat sapuṣpavarṣaṃ  
bherīś ca tri(95r1)divanivāsino 'bhijaghuḥ || 58 ||

このように、世間の人々の最高の幸福のために、天界と地上において法輪が転ぜられるや否や、雲もない空から、花の雨を交えた水が降り注ぎ、天界に住む者たちは太鼓を打ち鳴らした。

## あとがき

第14章第32偈以降も含む『ブツダチャリタ』全28章の現代語訳は、日本語訳では、講談社から刊行された「原始仏典」シリーズの第10巻に収められている<sup>34)</sup>。翻訳は複数の訳者による共訳であるが、同書の解説（483頁）によると、第15章の翻訳を担当されたのは梶山雄一先生である。梶山先生の翻訳は、チベット語訳からの和訳とはいえ、見事な翻訳というしかない。本稿においても先生の翻訳には大いに助けられた。ただ、梶山先生の翻訳を離れて、本稿で提示した梵文テキストとチベット語訳自体を比較すると、チベット語訳者が同一の梵文原典を見ていたと仮定しての話ではあるが、筆者とチベット語訳者の理解の違いは多くあり、それ以外にも、名詞と形容詞の区別がつかなくなったり、呼格の語や動詞の主語が明確でなかったり、関係代名詞や形容詞が何を修飾するかの見極めが困難であるなど、「チベット語訳」というものの限界が見えてくることも確かである。なお、漢訳について言えば、漢訳の『佛所行讃』は逐語的な訳ではなく、省略も多い。哲学書やその注釈書などであれば、チベット語訳は原典に代わるものとして十分に有効であると筆者も考えるが、様々な語形

33) Ms. khād yabhrāj.

34) 梶山雄一、小林信彦、立川武蔵、御牧克己訳『ブツダチャリタ』原始仏典第10巻、講談社、1985年。2019年4月に講談社学術文庫2549『完訳ブツダチャリタ』として再刊。他に日本語の全訳は、平等通照『梵詩邦訳仏陀の生涯』前編（1933）後編（1969）印度学研究所。杉浦義朗『ブツダチャリタ—仏陀への讃歌』桂書房、1986年。

を駆使した『ブッダチャリタ』のような詩作品となると、チベット語訳には荷が重い。さらに経典などと比べて、梵文のレベルが全く違う。従って、梵文原典に基づく筆者の和訳も発表する価値があるものと信じる。ただ、筆者の翻訳が完璧であるなどと言うつもりは毛頭ない。最初に述べたように、写本写真の状態は万全ではない。原文を想定した箇所も複数あり、解読不能の箇所も一部残されている。さらに、なるべく原文に忠実に訳したため、直訳体になって、日本語の持つリズム感から外れてしまった箇所があることも認めざるを得ない。失われた『ブッダチャリタ』第15章の梵文テキストを世界で初めてここに公開したばかりではあるが、今後ハルトマン教授とテキストの細部を再確認、再分析して、教授と共に英訳を付した改訂版テキストを公表する必要があるように思われる。本稿は、それを待つ間の、筆者一人による、現時点での暫定版にすぎないことを最後に述べておきたい。